観点別学習状況の評価の実施に向けて
―「読むこと」における「思考・判断・表現」の評価に焦点を当てて―*

岐阜県教育委員会学校支援課
指導主事　橋本　康秀

１　はじめに

令和４年度から実施される新しい学習指導要領では、資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえて、観点別学習状況の評価の観点については、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点に整理されました。教科「外国語」においては、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域が「内容のまとまり」とされ、それぞれの「内容のまとまり（領域）」を三つの観点で評価することになります。「話すこと[やり取り]」及び「話すこと[発表]」の２領域は、実際に英語を話している言語活動を通して見取ることになるため、スピーキングテストの実施が必須です。また「聞くこと」及び「読むこと」については、ペーパーテストの見直しが必要となりますが、どのような問題を出題することでそれぞれの観点を評価することができるのか分からないという声も聞きました。本稿では、まず２節で基盤となる定期テストの改善についてのポイントを整理します。３節では観点別学習状況の評価における「思考・判断・表現」の評価方法について説明します。４節はまとめとします。

２　定期テストの改善

(1) 定期テストの目的

観点別学習状況の評価について考える前に、一度テストの目的について考えてみましょう。根岸(2017: 6)は、「なぜテストをするか」という問いへの答えは、以下の五つに集約できるとしています。

・生徒の能力を知るため
・成績をつけるため
・指導の成否を知るため
・生徒の診断をするため
・生徒に勉強させるため

先生方の作成する定期テストは、上記の目的を達成するものとなっているでしょうか。それぞれの観点から見て、生徒の英語力がどうなっているかを知るなど、これら五つを達成するテストにするためには、何を測ろうとしているのかが明確である必要があるので、いわゆる総合問題と呼ばれる形式は避ける必要があります。若林・根岸（1993: 29)は、総合問題を「ある長さの文章を与え、その文章のいろいろな部分について、さまざまな形式の問いを提示し、これに答えさせる方式のテスト」と定義しています。靜（2002: 93)は、このような総合問題をやめ、「１つの英文素材に対して施す「変形」は多くとも１種類にせよ。」と提言しています。

今年度の授業力向上推進プロジェクト委員会では、観点別学習状況の評価について６人の委員の先生方と考えてきました。委員会の中である先生が示されたテストには、授業で既に扱った既習の英文が出題され、設問は空所補充、並べ替え、英問英答、語形変化と様々な問題が出題されており、いわゆる「総合問題」と呼ばれるものでした。しかし、この先生は、靜（2002)及び『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　外国語】』(以下、参考資料（2021)と呼ぶ）を参考に、自らのテストを抜本的に見直すことを決意され、次に作成されたテストでは、設問のテスティングポイントがはっきりし

ており、「知識・技能」と「思考・判断・表現」を大問ごとに測ることができる形となっていました(参考資料（2021)は国立教育政策研究所のウェブサイトで公開されています)。また、英文を読んで理解する力を測るために、基本的に全ての英文が新規又は教科書の本文をリライトしたものとなっていました。この先生のテスト改善に真摯に向き合う姿には、本当に頭が下がる思いです。

このように、観点別学習状況の評価に向けてテスト改善をすることは、そもそも望ましい定期テストとはどういったものか、またそうしたテストで生徒がしっかり点を取れるような指導とはどのようなものかを見直す機会にもなります。この機会を前向きに捉え、授業改善にもつながる「定期テスト改善」としたいものです。

(2)初見の英文を活用するポイント

定期テストで初見の英文を一部出題することについては、すでに多くの学校で取り組まれているかと思いますが、そもそもなぜ初見の英文を使うことが必要なのでしょうか。「定期テストでは授業で学んだことの理解度や定着度を測る」という趣旨で、教科書本文がそのまま使われることがありますが、既習の英文を使ったテストでは本文で学んだ言語材料の知識を確認しているだけで、授業で身につけた「英文を読む力」を測ることができていない可能性があります。「聞くこと」と「読むこと」の２領域については、教科書の内容をどれだけ理解し、覚えているかではなく、授業を通して学んだことを実際に活用することができるようになっているかを評価します。

参考資料（2021：62)では、初見の英文の作成方法として、以下が示されています。

・教科書で扱っているスクリプトや文章の構成を基に作成する。
・教科書の対話文をモノローグに、あるいは、教科書のモノローグを対話文に書き換える。
・学習した内容と関連のある話題について、同じテキストタイプで書く。その際、可能な範囲で、授業で扱った言語材料を使用する。
・学習した内容と関連のある話題について書かれた他の英文から引用する。

また、英文の難易度については、使用している教科書本文より易しい英文とすることが望ましいと思います。授業ではオーラルイントロダクションや語彙指導など教師からの支援を受けながら読むことが多いですが、テストは自力で読むことになりますので、教科書本文の難易度と比べて同程度のものであっても生徒からするとかなり難しいと感じるはずです。未習の単語や文法事項がないかを確認することや、注をつけるなどの配慮が必要となります。

今年度は、何度か中学校の授業を見学する機会がありましたので、定期テストについて聞き取りをしたところ、そのすべての中学校が定期テストでは基本的に初見の英文を扱っていました。こうしたテストを受けている生徒が、この４月から１年生として入学してくることも理解しておきたいところです。

(3)「半初見英文」の活用

ここまで初見の英文について考えてきましたが、授業で丁寧に扱った教科書本文も有効活用したいものです。そこでおすすめは「半初見英文」の活用です。初見の英文の作成方法については、参考資料（2021：62)で４点示されていることを確認しましたが、中でも教科書本文の対話文をモノローグに、あるいは、教科書のモノローグを対話文に書き換えるなど、教科書本文をリライトして使用することが効果的です。これにより、完全に初見の英文ではありませんが、教科書の英文を使いつつも単に暗記しているだけでは対応できない問題を作成することができ、教科書本文で身につけた「知識・技能」を測ることができます。この他にも「半初見英文」は以下の方法で作成することができます。

・教科書本文の一部又は全体をパラフレーズする。
・教科書本文を要約する。
・テスト問題の選択肢に、授業で扱っていない英文を用いる。

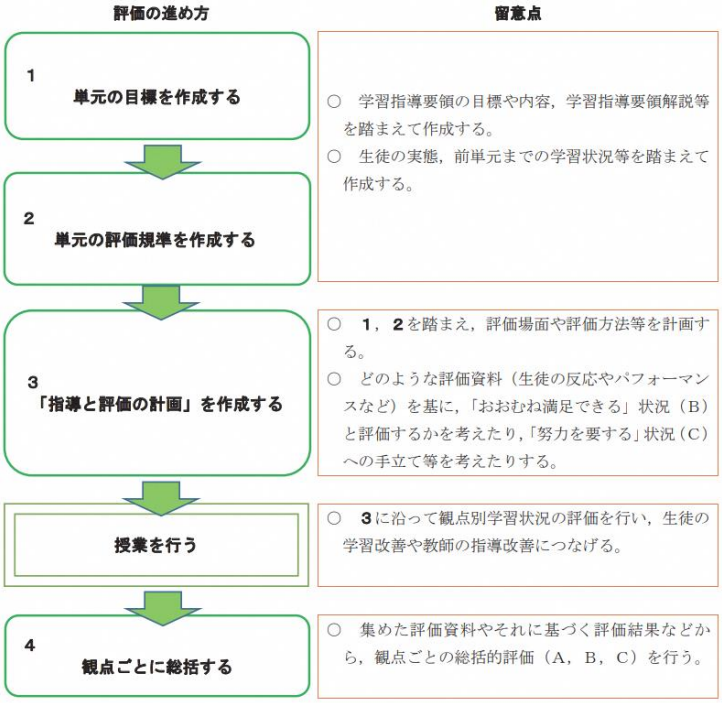
要約文やパラフレーズされた英文は、テキストデータとして指導書等に収録されていることがありますし、ALT に作成を依頼することも考えられます。英文をパラフレーズする際は、教科書本文を別の人物の視点から書き換えることもできます。

根岸（2017）では、生徒の能力をきちんと知ることができるテストか、また指導の成否を知ることができるテストかという点に加え、特に定期テストは「いい波及効果が得られるか」、つまり生徒にいい勉強をさせるためのテストとなっているかも大切な点だと述べられています。具体的な設問例としては、「空所補充」以外にも、「文章中の誤りを指摘し、訂正する問題」や「削除された語の本来の位置を指摘する問題」など、丸暗記ではなく意味を理解しながらしっかり読むことで答えられるものが考えられます。設問の作成は、静（2002）が参考になります。このように教科書本文で学んだ「知識・技能」が活用できるかを測る問題を出題することで、生徒はテスト対策として、文構造や意味をしっかり理解しながら繰り返し教科書本文を音読してくることが期待できるなど、プラスの波及効果が得られると考えられます。

3　新学習指導要領実施に向けて

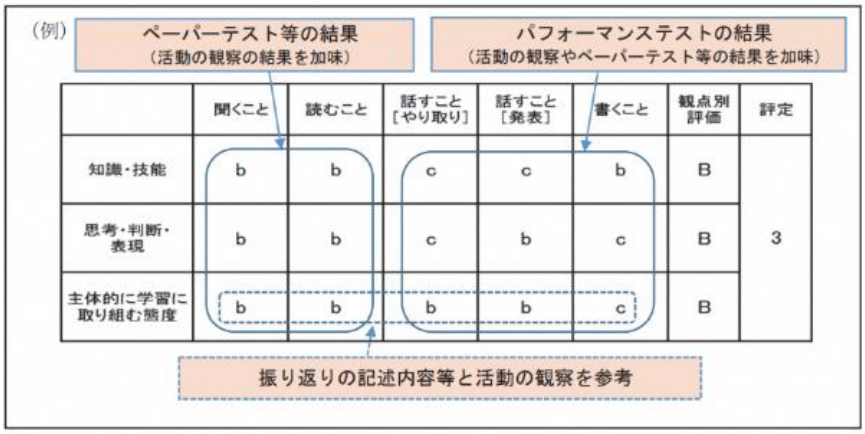
(1) 観点別学習評価の進め方

参考資料（2021：43）は、次の図の流れで評価を進めることを示しています。このような順で進めることで、その単元でつけたい力が明確となり、テストで測るべき力がはっきりします。なお、これ以前のプロセスとしては、各学校で作成した「CAN - DO リスト」を踏まえ、どの単元が設定した学習到達目標を達成するために適切であるか、また目標を達成するための言語活動とその評価方法を検討し、指導と評価の年間計画を作成しておくことが求められます。つまり、学習到達目標によって単元の扱い方を大きく変えることや、複数の単元を通して段階的に指導する計画を作成することも想定されます。



なお、「話すこと」は「やり取り」と「発表」のそれぞれの学習到達目標を設定するなど「CAN - DO リスト」の改訂をお願いします。

右の図にあるように、「聞くこと」及び「読むこと」はペーパーテスト等及び活動の観察の結果をもとに評価し、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」についてはパフォーマンステスト、活動の観察、またはペーパーテスト等の結果をもとに評価することになります。



(2)「読むこと」における「思考・判断・表現」の評価

参考資料（2021：35)では、「読むこと」における「思考・判断・表現」の評価規準作成のポイントは次のように示されています。

> 「聞くこと」、「読むこと」は、日常的な話題や社会的な話題について話されたり書かれたりする文章等を聞き取ったり読み取ったりして、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、必要な情報を聞き取ったり読み取ったり、話し手や書き手の意図を把握したり、概要や要点などを捉えたりしている状況を評価する。

※下線は筆者

つまり、「読むこと」の領域において、「思考・判断・表現」の観点から測定する場合には、テストにおいて、目的や場面、状況を設定し、①必要な情報、②概要、③要点、④詳細の四つについて問う問題を出題することになります。では、具体的にどのような設問を出題することでこの４点を問うことができるのか、次の設問例で確認しましょう。

	形式	設問例
必要な情報	選択	・アナウンスを聞いて，次に取るべき行動を選ぶ（L）。 ・プレゼンテーションを聞いて，その内容に合う表やグラフを選ぶ（L)。 ・イベントのポスターを示し，開催日時やスケジュールを聞いたり読んだりして，与えられた条件下で参加できる時間帯を選ぶ。 ・イベントの紹介パンフレットを読み，目的に合うものを選ぶ（R)。
	記述	・話し手の状況や意向，疑問を聞き取り，助言や感想を書く（L)。
概要	選択	・話題を選ぶ。 ・内容に合う絵や図，グラフ，英文を選ぶ。 ・内容に合うように，絵や図を並べ替える。 ・概要をまとめた文章を選ぶ。 ・内容に合うように，英文を時系列に並べ替える。
	記述	・内容に合うように，表やグラフの空欄に単語等を入れる。 ・内容に合うように，タイトルを付ける。 ・概要を書く。
要点	選択	・要点をまとめた文章を選ぶ。
	記述	・要点を書く。 ・要点について，自分の意見とその理由を書く。
詳細	選択	・詳細情報に合う英文を選ぶ。 ・詳細情報に合うように，表やグラフの空欄に当てはまるものを選ぶ。
	記述	・詳細情報を書く。 ・詳細情報について，自分の意見とその理由を書く。

※表中の「(L)」は「聞くこと」、「(R)」は「読むこと」、記載がない場合はいずれの領域でも使用可能な設問。

(3)「読むこと」における目標及び評価規準の設定例

参考資料（2021）は、単元に応じた評価規準の設定から評価の総括までとともに、生徒の学習改善及び教師の指導改善までの一連の流れを示しています。本稿では、事例２（英語コミュニケーションⅡ）を参考に「読むこと」における評価について確認します。　※下線は筆者

１　「英語コミュニケーションⅡ」における「読むこと」イの目標

「読むこと」

イ　社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。

２　単元の目標と評価規準

(1) 目標

ユニバーサルデザインに関する説明を聞いたり読んだりして、概要や要点、詳細を捉えるとともに、その内容や言語材料を活用して自分の考えをまとめ、話したり書いたりして伝え合うことができる。

(2)「読むこと」の評価規準　※下線は筆者

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・文章を読み取るために必要となる語彙や表現、比較表現の意味や働きを理解している。 ・ユニバーサルデザインについての文章を読み取る技能を身に付けている。	自分（たち）の考えを発表するために、国内外におけるユニバーサルデザインの事例についての説明文を読んで、概要や要点、詳細を整理して捉えている。	自分（たち）の考えを発表するために、国内外におけるユニバーサルデザインの事例についての説明文を読んで、概要や要点、詳細を整理して捉えようとしている。

なお、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の下線部分を見ると、「捉えている」が「捉えようとしている」となっていることが分かります。このように、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、「思考・判断・表現」の評価が「b」であれば、「主体的に学習に取り組む態度」も「b」となるなど基本的には一体的に評価することが可能となります。「主体的に学習に取り組む態度」については、参考資料（2021）の事例５をご確認ください。

参考資料（2021）では「思考・判断・表現」を測る問題例として、以下の問題が示されています。文章を読み、「②詳細」と「③要点」が理解できるかを測る問題となっています。

You are asked to read the following article about the Universal Design Font (UD font) to prepare for a presentation in English class.

Have you ever heard of "UD fonts?" UD stands for universal design, and UD fonts have been developed to make texts easier to read than existing fonts.

In 2019, Ikoma City in Nara Prefecture announced that they were going to use UD fonts in written materials at all elementary and junior high schools in the city in order to enhance students' motivation for learning and to improve their academic ability.

Before that, Ikoma City, along with several affiliated companies, had conducted an experiment using a survey with 116 elementary school students. The city prepared two sets of 36 sentences. One set was all written in an ordinary font used for textbooks, and the other set in a UD font. Then, the students were asked to answer if each of the 36 sentences is correct or incorrect separately in one minute, and the results were compared.

The number of students who completed the survey in one minute was close to 8 times higher when the UD font was used than when the ordinary textbook font was used. Also, the percentage of correct answers was higher for sentences in the UD font, and the difference was fifteen percentage points.

The city confirmed the effectiveness of the UD font and decided to install it on the computers of all elementary and junior high school teachers in the city. They believe the UD font can improve the student motivation to learn and academic achievement.

	UD font	Ordinary textbook font
Average number answered	29.5	24.0
Number of the students who finished answering 36 sentences	(1)	4
Percentage of correct answers	(2)	66

（「詳細を整理して捉えること」を評価する問題例）

Q1　Choose the best figure for (1) and (2) in the table. You may use an option only once.

(1) (2): ①　31　((1)の正解)　②　36　③　51　④　81　((2)の正解)

（「要点を捉えること」を評価する問題例）

Q2　What does the article mainly discuss?

① The superiority of UD fonts over ordinary fonts for textbooks.（正解）

② The difficulty of changing ordinary fonts into UD fonts at schools.

③ The advantages of students' learning with UD fonts at home.

④ The effectiveness of UD fonts when students give presentations in class.

ペーパーテストにおける「思考・判断・表現」の評価は、領域ごとの正答数によって行うことが考えられます。(例)［正答数］〇問以上：a ／ 〇～〇問：b ／ 〇問以下：c

正解数	「思考・判断・表現」の評価結果	
	「聞くこと」	「読むこと」
〇問以上	a	a
〇～〇問	b	b
〇問以下	c	c

(4) ペーパーテストの内容と授業での指導の一体化

今年度、恵那高校で行われた研究授業では、教科書本文を予習させることなく、概要把握、要点理解、詳細理解へと同じ英文を、タスクを変えて何度も読ませる、いわゆる「ラウンド制」の形で展開されました。生徒は一語ずつ和訳して理解するのではなく、未知語の意味を推測しながら、必死に英文と向き合い、徐々に理解を深めていきました。「ラウンド制」の授業は門田他（2010）が参考になります。

このように「読むこと」において「思考・判断・表現」できる力を養う授業が展開されているからこそ、定期テストの問題も初見の英文を活用し、授業で学んだことが実際に活用できるか試すためのものになります。テストだけがこのような形であったり、授業では「思考・判断・表現」する力を養っているのに、

テストは知識のみを測るものになっていたりしては、指導と評価が一体化しているとは言えません。「初見の英文では平均点が下がる」と不安に感じられる先生方もいらっしゃるかもしれませんが、当該単元の指導を始める前には、テストでどのような力を測るかを明確にし、そのテストで全員が目標に到達することを目標とする授業計画を立てることが必要になります。

仮に、教科書の本文で「カレーの歴史」について、「時の流れを示す表現などに着目しながら、時間軸に沿って概要を把握する活動」を行ったとします。定期テストでは、何か別の歴史についてまとめられた新規の英文を用いて「英文を時系列に並べ替える」等の問題を出題することが考えられます。しかし、このようなリーディングスキルは一度扱っただけで定着するものではないため、授業で繰り返し学習すること、複数の単元にわたり指導することが必要になります。次の①から④のように、「時間軸に沿って概要を把握する活動」を、類似の英文を用いて繰り返すこと、また、定期テストに類似の英文を出題することを宣言した上で「テスト対策」として新規の英文を配布することで繰り返し学習することが期待でき、「読むこと」における「思考・判断・表現」の一つである「概要を捉える力」を養うことができます。

①【授　　業】カレーの歴史（教科書本文）
②【授　　業】アイスクリームの歴史（新規の英文）
③【家 庭 学 習】自転車、ピザ、インターネットの歴史など（新規の英文）
④【定期テスト】コンピューターの歴史（新規の英文）

テストでの正答率が低ければ、指導に何らかの課題がある可能性があります。テストの結果で自らの指導を振り返り、その評価を次の指導に生かすことが指導と評価の一体化となります。

4　おわりに

本稿では、主に「読むこと」の評価について考えてきました。「読むこと」における「思考・判断・表現」は、一見すると複雑に思えますが、英語を読む力を伸ばす上では必要な観点ということが分かります。これまで先生方が磨かれてきた指導技術は今後も存分に発揮しつつも、「読む力」をさらに伸ばすための指導とその評価について考えるきっかけとしていただけると幸いです。また、その他の四つの領域の評価については、参考資料（2021）で確認してください。

新しいことに挑戦したり、何かを変えたりするということは非常にエネルギーがいることですし、不安にもなります。しかし岐阜大学教授の巽徹先生からは、「この指導要領改訂を負担としてではなく、授業改善のチャンスと捉えたいですね。」というお言葉をいただきました。令和４年度は授業と評価が大きく変わる１年となります。約 10 年に一度のこの「変化」を指導と評価を見つめ直す「チャンス」と捉え、プロとして英語を教える責任と誇りを胸に、授業改善を進めていきましょう。

*この内容は橋本（2022）の一章の一部を削除し、その他を抜粋したものである。

参考文献

門田修平・野呂忠司・氏木道人. 2010.『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店.

国立教育政策研究所教育課程研究センター. 2021.『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　外国語】』東京：東洋館出版社.
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_gaikokugo.pdf

靜哲人. 2002.『英語テスト作成の達人マニュアル』東京：大修館書店.

根岸雅史. 2017.『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』東京：三省堂.

橋本康秀. 2022.「観点別学習状況の評価の実施に向けて―「読むこと」における「思考・判断・表現」の評価に焦点を当てて―」『高校英語教育の歩み』第 64 号（岐阜県高等学校教育研究会英語部会）, pp. 2-9.

若林俊輔・根岸雅史. 1993.『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』東京：大修館書店.